

『本音と嘘とロクンロール（仮）』

第1稿

大川祥吾

登場人物

真琴 (23)	ロックバンドのボーカル
ユズ (23)	都内で活動するベーシスト
香奈子 (22)	八百屋の娘のギタリスト
明美 (20)	学生のドラマー
店長 (39)	真琴が働く居酒屋の店長・男
森元 (26)	真琴の同僚のバンドマン・男
茂村 (48)	ライブハウスの雇われ店長
J (40)	バンド「フリード」ボーカル・男
Y (40)	バンド「フリード」ギター・男
K (40)	バンド「フリード」ベース・男
神崎 (42)	ライブハウスのオーナー
大吾 (28)	人気バンドのボーカル

○居酒屋・キッチン

洗った食器を棚に並べている、店員姿の

真琴（23）と、同じく店員姿の森元

（26）。

そこへ店長（39）が入って来る。

店長 「おはういーす」

二人の横を通り過ぎようとしたが、真琴の存在に気づき止まる店長。

店長 「あれ、マコお前なんで居んの？」

真琴 「は？ 今月は来れんなら来てって」

店長 「ああ、来れるんだ、あれイベントは？」

真琴 「まあ……」

森元 「結局出ないんですって」

真琴 「いいんすもう、まあそろそろ潮時ってのも

ぶっちゃけ感じてたんで」

店長 「ええ！ 勿体ねー、え、だってファンも結構

居るんじゃない」

森元 「そうだよ、なんならベースは俺が……」

真琴 「（森元に）無理、（店長に）いやマジそろ

そろ将来とかも考えてたんすよね、なんでやっぱ、稼いでおかないと」

店長 「いやあ勿体ないよ、まだやれんじゃない」

森元 「マジそれは無いよ、あ、じゃあ日曜のうち
のバンドのライブにゲストとかで出ない？」

真琴 「そういうのいいんで」

そこへお客さんが入店。

真琴 「らっしやいま、あ」

店の入り口には香奈子（22）と明美（20）が立っている。

○居酒屋・ホール

鳥の唐揚げが、森元に運ばれて香奈子と明美のテーブルへと運ばれる。

香奈子 「おいしそー」

森元 「はいお待たせ追加のからあげー」

香奈子 「いただきやーす」

森元 「（明美を見て）新しいドラムの？」

香奈子 「（食べながら）そっす」

明美 「（スマホしながら）あ、うす」

笑顔で二人を見つめる森元。後ろから真琴が近づいて来て森元を小突く。

真琴 「（森元に）なにサボってんすか」

森元 「ほらあ、こうして香奈ちゃんも来てるんだし、もう一回頑張ってみたら？」

香奈子 「あ、マコさんも食べます？（唐揚げ）」

真琴 「いやバイト中だし、つか働いてください

よ」

森元 「へーい」

森元が奥へと消えていく。

真琴 「（席に座る）無理だろもう、辞退の連絡もしちゃってんだし」

香奈子 「そうなんですけど、ようやく連絡取れて」

真琴 「あんな大きいイベント、もう次出るところも決まってるって」

香奈子 「とりあえず、会うだけでも」

真琴 「誰でも良いつて訳じゃないし。ああ、明美ちゃんの实力は認めてっけどさ」

明美 「あ、うす」

真琴 「どうせたいした事無いつて！そんなのと会ったって時間の無駄じゃん」

香奈子 「腕はいいらしいんで」

真琴 「いいや、会わなくていいよ！」

唐揚げを食べる真琴。

○練習スタジオ・個室

中央で座っている真琴、香奈子、明美。

真琴 「え、何、香奈も初めてなの？」

香奈子 「はい、連絡はしてますけど」

スマホを見せる。

真琴 「まじか」

香奈子 「学校の先輩の知り合いで……（着信音）あ、もう着くみたいっす」

そわそわして待つ三人。

ドアがノックされる。

香奈子 「はい！どうぞ！」

ガチャリと重いドアが開けられ、緊張する三人。そこへ入ってきたのは、ゴリゴリの原宿系ファッションに身を包んだハイテンション女子ユズ（23）だった。

ユズ 「どーもー！ユーズちゃんですー」

香奈子 「あ、れ、連絡してた、香奈子、です」

ユズ 「かなぴょーん、はじめましてー」

真琴 「ぴよ……？」

ユズ 「（真琴に向かって）わー、生マコるーん！はじめましてー、あ、私服は結構かわいい系なんだね！もつとちよつと怖い系のそっち系かと思ってた良かったーよろしくねー」

ドン引きの真琴。

○練習スタジオ・ロビー

香奈子が真琴に責められている。

真琴 「無いでしょ」

香奈子 「でも腕はいいらしいんで」

真琴 「それ以前の問題」

香奈子 「いやほら、初対面で、緊張してたとか」

真琴 「緊張でああはならないでしょ、え、うちら一応ロックバンドだよね？」

香奈子 「はい」

真琴 「でっかいイベントに出る為にメンバー探してるんだよね？」

香奈子 「……はい」

真琴 「別に、良いんだけどさ」

沈黙してロビーに座る二人。

○練習スタジオ・個室

ユズがベースをセットし準備万端なところへ、真琴と香奈子が入ってくる。

ユズ 「あ、おかえりー遅かったね、うんこ？あ、ねえねえマコるんはさあ、ずっとこっちでやってるの？都内のハコでやったりはしな……」

真琴 「（話を遮り）うちら、実力主義なんで」
ベースに目配せをする真琴。

ユズ 「聞いてるよ、それでメンバー辞めちゃったんでしょ」

真琴 「はあ？」

ユズ 「いいよ、じゃあ何やるっか？」

険悪ムードな二人を香奈子が遮る。

香奈子 「あ、ユズさん譜面は見て……」

ユズ 「うん見た、曲も一通りは何回か」

香奈子 「じゃあ（譜面をめくって）この曲とか」

喧嘩腰のまま椅子に座る真琴。

譜面をパラパラと見つめるユズ。

ユズ 「オツケーいくよー」

妙な緊張感の中、ユズがベースを弾き始める。めっちゃくちゃ上手い。力強く軽快な指さばきに香奈子は直ぐに興奮し、明美もスマホから目を離す。渋い顔をしていた真琴も徐々に顔が緩む。そのまま音楽で次のシーンへ。

○居酒屋・キッチン

前シーンから音楽でモンタージュ。

森元と真琴が話している。

喜んでいる森元。

○小さいライブハウス・楽屋

引き続きモンタージュ。

ステージ衣装で出演準備をしている真琴たち4人。一人だけ衣装のテイストが違うユズに文句を言いたげな真琴。そこへバンドマン姿の森元が呼びに来てステージへ出る4人。盛り上がる。

○公園（夜）

4人でブランコ付近で打ち上げ。

真琴だけ少し離れて孤立している。

香奈子 「（ツマミを食べながら）え、じゃあ高円寺とかでもライブやってたんすか？」

ユズ 「やってたやってたー！高円寺いーよー！」

香奈子 「やべー、高円寺やべー！」

明美も興奮した表情で話を聞いている。

香奈子 「マコさんいけますよね！」

真琴 「……おお」

香奈子ガッツポーズ。

そんな真琴をジッと見ているユズ。

ユズ 「素直じゃないねえマコるんるんは」

香奈子 「え、あの、ちよ……」

真琴 「はぁ？」

ユズ 「だって無いの？こう、仲間ー！イエーイ！

みたいなのさーねー」

真琴 「あーうちそういうのじゃ無いんで、てかあんたなんでうちでやりたいの？」

ユズ 「ひーこわいよおーあけみーん」

真琴 「ちよっと！」

香奈子 「あの、ユズさんはこないだバンド解散しちゃって、ちようどその時うちの音源聞いてくれてヘルプならって！」

ユズ 「解散じゃなく活動休止中だけどねん」

真琴 「どっちだっていいけど」

また険悪なムードになる二人。

香奈子が真琴をその場から離す。

香奈子 「マコさん……出たいんすよね？」

真琴 「……（軽く頷く）」

香奈子 「じゃあ私、明日の朝一でしげさんに辞退の

キャンセルの連絡しますんで」

真琴 「……（頷く）」

香奈子 「はい決定！じゃあ、飲みますよ！」

再び公園で飲み始めるメンバー達。

真琴もしぶしぶ加わる。

○真琴の部屋（夜）

真琴がベッドの上でギターを抱えながら物思いに耽っている。

○河原の土手（夕方・回想）

真琴がベースを背負っている女と話している。女の言葉にショックを受けた表情の真琴。

真琴 「抜けるって事？」

ベース女 「悪いけど……てか正直つまんないだよね、一緒にやっつて」

真琴 「（平静を装い）あ、そう」

ベース女 「どうせあんたらじゃ無理だと思うし」

去り際に捨て台詞を吐くベース女。

その後姿を真琴は睨みつけている。

○真琴の部屋（夜）

物思いに耽っている真琴。

○大きいライブハウス・事務所（翌朝）

ライブハウスの店長・茂村（48）と香奈子が話している。横にはユズも居て、茂村は困った表情をしている。

茂村 「せめてあと1週間早く言ってくれれば」

香奈子 「だから無理だったんすもん」

茂村 「いやあ、だって辞退って言うから」

香奈子 「しげさん、頼むっ！このままじゃマコさんにあわせる顔がねえ！」

茂村 「俺もなんとかしたいけど、もうフライヤーとかも刷っちゃってんだし」

香奈子 「そこをどうにか！」

茂村 「いやいやいやいや」

ユズ 「うちの変わりって誰が入ったの？」

茂村 「ええ？」

香奈子 「あ、フリードっていう……オジサン達？」

茂村 「でかいイベントなんだからさ、こっちも

色々あんのよー」

香奈子 「絶対うちの方がいいっす」

茂村 「だって辞退って言うから」

香奈子 「こっちも色々あんすよ！」

茂村 「もう一ヶ月無いんだよ、みんなコレ出たいんだから」

ユズ 「その変わりに入ったオジサン達がOKって言ったら良いの？」

茂村 「……え？」

ユズ 「やっぱ出なくていいやーって」

茂村 「ええ？ま、まあ……」

○居酒屋・ホール

バイト姿の真琴が、香奈子、ユズ、明美の三人と、大きいテーブル席の横で言い争いをしている。

真琴 「だから、無理って言ったじゃん」

香奈子 「な・の・で、今からここでパーティをしようという事になりました」

真琴 「はあ？」

ユズ 「うちの変わりに出るっていうオジサンバンド達に、やっぱり変わってーって言うの」

真琴 「意味わかんねーし」

香奈子 「フリードっていうバンドなんすけど」

ユズ 「正々堂々、真正面からズバーっとお願いすればきつと大丈夫！」

香奈子 「やりましようマコさん！」

真琴 「嫌だよ！てかうちバイト中だし」

森元 「その点なら大丈夫だ！」

森元と店長が二人並んで、ホール奥からガッツポーズをしてこっちを見てる。

真琴 「ちょっ……」

ユズ 「マコるん、出たいんでしょ？」

真琴 「……別に」

香奈子 「マコさん」

ユズ 「私は出たいよ！」

真琴 「え？」

ユズ 「まだステージは一回だけだけど、みんなとやって楽しかったし、もうちょつとやってみたい」

真琴 「……」

香奈子 「レベルの人も観に来るってしげさんも言ってたし」

真琴 「まあ……ってか、で、なんでこれなの？」

(テーブル席を指して)

香奈子 「それは……(ユズを見る)」

ユズ 「ん？ああ、なんか、接待的な？」

真琴 「接待！？」

○居酒屋・ホール（時間経過後）

大きいパーティ席に真琴、香奈子、ユズ、明美の4人が横一列に座っている。向かいはヴィジュアル系の衣装に身を包んだオジサン達3人（J・Y・K）が横に並んで座っている。

J 「レイディ達、話って？」

ユズ 「イベント出るの変わって！」

直球の要望に動揺する真琴と香奈子。

ユズ 「まあ飲みねえ飲みねえ」

J達のグラスに強引にビールを注いで廻るユズ。

香奈子 「（小声で真琴に）こういうのが接待って言うんすか？」

真琴 「違う」

香奈子も景気付けにカクテルを飲み干す。

J 「（ビールを飲み）出演は変われねえ」

Y 「俺達だってやっと掴んだチャンスだ」

ユズ 「掴んだって、うちの代打じゃん！」

香奈子 「お願いします！一回辞退しておいて、勝手なのはわかってるんですけど」

J 「勝手過ぎるだろ」

Y 「俺達だってずっと夢みたドリームだ」

ユズ 「まあ飲みねえ飲みねえ」

J 「あ、ちょ、待っ（ビール飲む）」

香奈子 「そこをなんとかお願いします！」

ユズと香奈子の頑張りを横目で見ていた
真琴も、ついに動き出す。

真琴 「ほんと勝手なんすけど……お願いします！」

出たいんす！」

香奈子 「（真琴の言葉に喜びながら）お願いしますす！」

J 「ええ、いやちょっとそう言われても」

Y 「お、俺、俺たちだって……」

森元 「はい、お待たせしましたー唐揚げでーす」

香奈子 「わー美味しそー」

真琴 「お願いします！」

ユズ 「まあ飲みねえ飲みねえ」

X X X

時間経過。

みんな酔っていて、少し仲の良い雰囲気
になっている。

J 「わかった！レイデイ達にここまで言われて

引き下がっちゃ男が廃るってもんよ」

香奈子 「え、ええっ！」

真琴 「え、じゃあ？」

Y 「ちよつとお前……」

J 「いいよ！イベント変わってやるよ！」

喜ぶ真琴達4人。
そして飲み会は続いていく。

○公園のベンチ（早朝）

香奈子と明美は隣のベンチで寝ており、
真琴が一人で座っている。そこへユズが
近づいてくる。

ユズ 「はい、おみずー」

真琴 「……ありがとう」

ユズ 「いーえー」

真琴 「……色々、ありがとう」

ユズ 「んー？（真琴の顔を覗き込む）」

真琴 「なに？」

ユズ 「ちよーっと素直になったなーって」

真琴 「うるせ」

二人、ベンチで横に座る。

真琴 「正直、今回は諦めて、また次でいっかなー
とかって思ってた」

ユズ 「ダメだよ」

真琴 「ん？」

ユズ 「一回逃げたら、次もまた逃げる」

真琴 「……なんか、わかる気する」

ユズ 「みたいな事を、ドラマで聞いた事ある」

真琴 「ドラマ情報か」

真琴、ベンチから立ち上がり背伸び。

真琴 「ユズが羨ましいよ」

ユズ 「（可愛く）えー？」

真琴 「ちよいちよいイラッとすっけど」

ユズ 「ちよっとー」

真琴 「真っ直ぐだなってさ」

ユズ 「マコるんるんは曲がりくねってるもんね」

真琴 「曲がりくねって、たまに、どっち向いてる

かわかんなくなる時ある」

ユズ 「そっか」

真琴 「あー、眠いね、帰っかー」

ユズ 「（香奈子と明美を見て）起きるかな？」

真琴 「起こす！」

寝ていた二人を起こす真琴とユズ。

○八百屋・店頭

前掛けをした香奈子が接客をしており、その横でユズが待っている。

香奈子 「はい、お釣り40円です、あざしたー」

お客 「どうもありがとー」

香奈子 「で、後はっすね、打ち込み系のシンセと女

ボーカルのユニットの5組っす」

ユズ 「オツケー」

香奈子 「そーいやユズさん、バンドの方は大丈夫な

んすか？」

ユズ 「うん！来月に一回会おうってだけで、まだなーんも無いから」

香奈子 「そうですか」

少し周りを気にしてから、改まってユズの方を向く香奈子。

香奈子 「ユズさん、今回は本当にありがとうございます
ました」

ユズ 「えー、いーよーそんな」

香奈子 「急に声かけさせて貰ったのに、こんなに色々やって貰っちゃって」

ユズ 「だってカナッぴ頑張ってるんだもん」

香奈子 「そんな……」

ユズ 「地元でやってみたかったのもあるし」

香奈子 「そうなんですか」

ユズ 「中学ん時からずっと都内ばっかだったし、紹介してくれたきよぽんにも借りあったしね」

香奈子 「そうなんすね」

ユズ 「それに……マコるんの歌聞いて、いいなって思った」

香奈子 「（喜んで）そうなんです！」

ユズ 「ふふっ！（少し真面目な表情になり）マコるんは何であんなにひねくれてるの？」

香奈子 「え……」

ユズ 「実力重視で厳しいから、あんま上手くないっ

てないって聞いたけど」

香奈子 「……私も、前の事は人から聞いたただけなんですけど……」

ユズ 「うん」

ここから映像は変わるが会話はN A。

○河原の土手

真琴が一人で土手に座り黄昏れてる。

香奈子N 「マコさんが高校の時に組んでたバンドで、ずっと一緒にやってた友達と喧嘩したみたいで」

ユズN 「ふーん」

香奈子N 「それ以来、なんていうか、あんまり人を信用しないっていうか」

ユズN 「ああ、わかる！信用してない」
真琴くしゃみをする。

○八百屋・店頭

再び二人の会話に戻る。

ユズ 「カナちゃんはマコるんが好きなんだね」

香奈子 「え！？ああ、はい！いや、まあ」

ユズ 「ぬふふー、愛されてるなーマコるんは」

香奈子 「ほんとっすよ！」

ユズ 「おしっ！じゃあ、頑張ろっか！」

香奈子 「はい！」

ハイタッチする二人。

○練習スタジオ・個室

香奈子以外の三人が譜面を見ながら打ち合わせをしている。

真琴 「あと一週間しか無いんだよ」

ユズ 「でもさ、絶対こっちのが良いって」

明美 「やれます！」

真琴 「ほんとに？」

ユズ 「あけみんやるうー」

そこへ慌てた香奈子が入ってくる。

真琴 「カナ、どうしたん？」

香奈子 「やっぱ、うちら出れないって……」

三人 「はあ！？」

○大きいライブハウス・事務所

真琴達4人に茂村が責められている。

茂村 「いや、聞いてたよ！で、彼らにも連絡してただけどさ、出演の書類を訂正しないとって、でも全然繋がらなくて、で今朝やっぱり出ますって連絡来て、書類上では彼らが出る事になってるし」

香奈子 「でも私たち、本人から」

茂村 「それはそうかもしれないけど」

香奈子は電話をかけるが繋がらない。

香奈子 「出ない……」

茂村 「俺も何度かかけたんだけどさ」

真琴 「いいよ、もう」

香奈子 「え？」

真琴 「どうせ飲んでる時の話だし、こっちが最初に辞退したんだしさ」

ユズ 「……」

香奈子 「マコさん、でも」

真琴 「いいんだって！」

表情を隠すように急に振り返る真琴。

真琴 「じゃあ、しげさんまた！」

茂村 「ん、あ、ああ」

そのまま出ていく真琴。追いかける三人。

○道路

無言でトボトボ歩いている4人。

ユズ 「なんか、まだ手ないかな」

真琴 「……」

ユズ 「他の出る人をお願いしてみるとか」

真琴 「変わって良いなんて言う訳ないじゃん！」

ユズ 「まあ……」

沈黙の後、真琴が大きく深呼吸する。

真琴 「頑張ったほうじゃね？ユズもありがとう」
ユズ 「ちよつと」

真琴 「別にイベントってこれだけじゃねえし」

香奈子 「マコさん……」

ユズ 「諦めんの？」

真琴 「……」

香奈子 「ユズさん？」

ユズ 「なんか他にさあ……」

真琴 「だって諦めるしかないじゃん」

拳を握りしめ、硬直している真琴。

周りの三人も動けずにいる。

真琴 「それしか、無いじゃん……」

歩き去る真琴。

その後姿を見送るユズ。

○真琴の部屋（夜）

ベッドに寝ながら、虚ろな表情で天井を
ジッと見つめている真琴。

○居酒屋・ホール

いつもより少しだけ暗い表情で仕事をし
ている真琴。それを後ろから心配そうに
見ている森元と店長。

○河原の土手（夕）

川を見つめながらゆっくり歩く真琴。

○大きなライブハウス・入口

本日のライブという名目で、目指していたイベントの看板が出ている。

○大きなライブハウス・事務所

茂村がそわそわしながら座っている。

スーツの男・神崎（42）が入ってきて、周りのスタッフに声をかける。

神崎 「おはよう、今日よろしく」

茂村 「神崎オーナーおはようございます」

神崎 「おはよう、今日よろしく」

茂村 「あ、あの、実は相談がありました……」

神崎 「なんででしょう？」

○真琴の部屋

ベッドで寝ている真琴。スマホの着信音が鳴り、画面を見てから、音を切っ

ないで放置。
するとLINEの着信が鳴る。
段々と激しく鳴り出す。
するとこっちの音も消して、ベッドに潜り込む真琴。

○大きいライブハウス・入口付近の路上

香奈子とユズと明美の三人が居る。

香奈子 「（スマホを持って）ダメ、だんまり」

ユズ 「ここはうちに任せて」

香奈子 「（深く頷き）お願いします！」

走り去る香奈子。

ユズ 「さーて、こっちも頑張るよあけみん」

明美 「うす」

○大きいライブハウス・事務所

神崎と茂村が話してる。

神崎 「却下ですね、そんな例外を作ったら今後のイベントの運営に影響が出るので」

茂村 「そ、そう、なんですが」

神崎 「話は以上ですか？では終わりですね」

○大きいライブハウス・入口付近の路上

ユズと明美が誰かを待ち伏せている。

明美 「来ました」

ユズ 「よし」

若手の男性バンドマン4人が、こちらに向かって歩いてくる。

ユズ 「はーじめましてー」

急に声をかけられ驚くバンドマン達。

○真琴の部屋

ベッドで毛布にくるまっている真琴。

インターホンが鳴る。何度も鳴る。

無視出来ず、毛布から出る真琴。

○大きいライブハウス・入口付近の路上

ユズたちと若手の男性バンドマン達が意気投合して話をしている。

するとまた新たな出演者らしき人が通りがかり、ユズがまた声をかける。

○真琴の部屋・玄関

香奈子と真琴が対峙している。

真琴 「出られるって、訳じゃないんでしょ」

香奈子 「はい、でも今、ユズさん達が」

真琴 「……悪いけど、今もうさ、頭ん中ぐちゃぐ

ちゃで、ライブとか考えられねーし」

香奈子 「……」

香奈子のスマホに着信。

ユズからで、画面に「出演者の方はOK、後はしげさん次第。死んでもマコるんるん連れて来てねん」と書いてる。

香奈子 「死んでもって……」

真琴 「わりー（部屋に戻ろうとする）」

香奈子 「待って下さい！」

真琴 「（振り返り）コレじゃなくてもいいじゃん、ちゃんと落ち着いて準備して、またメンバー固めて、それからしっかり……」

香奈子 「（遮り）ダメです！行きましたよう！行くんです！行かなきゃダメなんです！いいから来いや！」

初めて見せる香奈子の鬼気迫る表情に驚く真琴。

○大きいライブハウス・入口付近の路上

お客さんが入り始めている。その横でユズと明美の二人が立っている。

森元 「あれ、ユズちゃんと明美ちゃん」

ユズ 「おー！からあげっち！」

森元 「え、なに俺からあげって呼ばれてんの？あ、てかあいつは？結局出れんの？」

ユズ 「出れるかはわかんない、マコるんるんは：
：今から来る」

森元 「そっか、じゃあ、頑張ってる」

ユズ 「おう」

去る森元と入れ替わるように茂村が二人の
のところへ来る。

明美 「あ、しげさん」

ユズ 「どうなの？」

茂村 「すまん、やっぱオーナー説得出来なかつた」

ユズ 「えー、ちょっとどーすんの？出る人達には時間貰ったよー」

茂村 「あれマコっちゃんは？」

ユズ 「今来る！」

茂村 「あ、そう、もう一回、イベント始まってからもう一回説得してみるから」

ユズ 「しげるっち」

茂村 「うん、いやしげむらだけど」

ユズ 「頼むぜ！」

自転車を二人乗りで、真琴と香奈子が走っている。

○大きいライブハウス・会場内

若手のバンドがライブをしている。

客席でユズと明美が不安な表情。

○大きいライブハウス・会場舞台袖

茂村と神崎が話をしている。

神崎 「え？先程その話は終わりましたよね？」

茂村 「そうなんですけど、そうでもなくて」

神崎 「今日はレーベルの方達も来てるんですよ」

茂村 「はい……でも……」

神崎 「主催側がルール破ったら、誰がこの場を取りまとめられるんですか？」

言いくるめられて黙る茂村。

○大きいライブハウス・控え室

待っていたユズと明美の元へ、真琴と香奈子が入ってくる。何も言わず、じっと真琴の顔を見てニヤリと笑うユズ。それに応じるように頷く真琴。

香奈子 「どんな感じですか？」

ユズ 「まだしげさん待ち、いつでも出れるように準備しておいて」

香奈子 「はい！」

○大きいライブハウス・会場内

オジサンバンドの3人がライブをしている。客席の後ろにスーツ姿の男が真剣にライブを見ている。

○大きいライブハウス・控え室

真琴達の元へ茂村が入ってくる。

真琴 「しげさん？」

浮かない表情のしげさんに察する4人。
するとそこへ、最後に出演するバンドの大吾（28）が入って来る。

大吾 「あ、ちーっす（ユズを見て）あ、さっきはどうもー、つてか、ユズさんすよね？スラッシュユワイズの？」

ユズ 「ちーっす」

大吾 「え、何してんすか？解散？」

ユズ 「活動休止中なの！」

それを聞いて驚く茂村。

茂村 「マユっちゃん、1曲だけだぞ」

真琴 「え？」

茂村 「これ、あと2曲で終わるから、セットチェンジ簡単にいける曲でやって」

香奈子 「え、いいんすか？」

茂村 「わかんないけど（ユズを見て）こんなチャンス、無いんだろ？」

真琴 「……うん！」

茂村 「よしじゃあ頼むぞ、大吾もいいんだな？」

大吾 「いいね！楽しくなってきた、あ、チューニング手伝う」

みんなで一斉に準備を始める。

○大きいライブハウス・会場内

オジサンバンドの3人が演奏を終える。

J 「センキューみんな！名残惜しいけど、また何処か次の箱で会おうぜ！やっぱりイベントっていうのは……」

話している途中に大吾達がステージに入ってきて、ドラムのチューニングやアンプのセットを始める。

J 「（周りを気にしながら）色んな、バンド達が集まって、音をぶつけ合っているか、あれ、セットチェンジ早くね？」

真琴が香奈子、明美、ユズと目を合わせ
てから、ステージへ出てくる。

J 「あれ、お前、あ……」

真琴 「（マイクを奪って）はい、ありがとうございます
ざっした！」

客席に拍手を促しながらオジサン達をス
テージから見送る。ドラムのセットにま
だ時間が掛かっており、大吾達と明美が
準備している。

真琴 「どうもー！皆さん今日はイベントお越し頂
きありがとうございます！イベントのラストを飾る
大吾さん達のバンドの前に、ちょっとだけ、時間くだ
さす」

ドラムのセット状況を見ながら時間を稼
ぐ真琴。ユズと香奈子は準備完了。
客席の後ろでスーツ姿の男が見ている。

○大きいライブハウス・会場舞台袖

神崎と茂村が話をしている。

神崎 「それは今相談すべき内容ですかね？」

茂村 「いやあ、やっぱりその、早い方が」
ステージ場の異変に気付く神崎。

茂村 「あ、神崎オーナーあのですね、もう一個相
談がありましたてすね……」

ステージへ向かおうとする神崎を必死で止めようとする茂村。

○大きいライブハウス・会場内

まだドラムのセット中。

真琴 「ちょい色々あって、今回はこういう形での出演になったんですけど……」

スポットライトを浴びながら、客席を眺める真琴。森元や、前のライブでも見た事ある顔が居る。横を見ると香奈子とユズ、そして後ろの明美がセットの終わりを示すアイコンタクト。

真琴 「やっぱステージの上は、最高の景色っす」

真琴が右手を高く振り上げる。
明美のステイックがカウントを刻み、ユズと香奈子の演奏が始まる。

真琴 「全力で行くんで、盛り上がるうぜ！」

熱気に包まれる会場。

ステージへ出ようとする神崎を力づくで必死で止める茂村。

イントロだけでもどんどん盛り上がる会場内に、後ろのスーツ姿の男も目を見張ってステージを見ている。
神崎も止めるのを諦める。

○ 駅

時間経過を表す遠景の間。

駅の入口前には沢山の荷物を持ったユズと、自転車に乗った真琴が居る。

真琴 「荷物多すぎじゃね？」

ユズ 「そうかなー？」

真琴 「じゃ、元気で」

ユズ 「マコるんるんもね！あっちで待ってるよ」

真琴 「ああ」

ユズ 「まあ、私を超える奴はそうそう居ないだろうけど」

真琴 「そんな事ねえよ」

ユズ 「素直じゃないねえ、マコるんるんは」

真琴 「（ニヤリと笑い）じゃ、行くわ」

ユズ 「うん」

自転車に乗る真琴。見送るユズ。

少し離れた所で止まる真琴。

真琴 「（振り向き、大声で）ぜってー東京行つてやつからなー！待っとけよー！」

ユズ笑顔になる。真琴も笑顔。

エンドクレジットに合わせて最後のライブ映像

完